

## 病害虫発生予察特殊報 第2号

害虫名：タバココナジラミ バイオタイプQ  
学名：*Bemisia tabaci* Q-biotype  
発生作物：トマト

### 1 発生確認経過

平成25年9月、南信地方のトマト栽培施設において採集したコナジラミ類の成虫及び幼虫を、長野県野菜花き試験場で同定したところ、タバココナジラミであることが判明した。同場を通じて(独)農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所に遺伝子診断による同定を依頼した結果、タバココナジラミのバイオタイプQであることが判明した。

本種は、国内では平成17年に宮崎県で初確認されて以来急速に分布が拡大し、現在までに42都府県で発生が確認されているが、本県では初確認である。

### 2 形態

- (1) 成虫は体長が約0.8mm、翅は白色で体は淡黄色である。オンシツコナジラミと比較してやや細く体色が濃い。静止時の翅が背面で重ならず、腹部が見える。(図1、図2)
- (2) 4齢幼虫体は長さ0.8~1.0mm、体色は黄色~淡黄色であり、中央が厚く縁が薄い楕円形の三葉虫型で、周囲に刺毛状の分泌物は認められない。オンシツコナジラミの4齢幼虫体は乳白色で厚みのある楕円形のコロケ型で、周囲に刺毛状の分泌物がある。(図3、図4)
- (3) タバココナジラミの他のバイオタイプと形態上の差異は認められていないため、肉眼での識別は不可能である。

### 3 生態と被害

- (1) 卵、幼虫(1~4齢)を経て、成虫となる。孵化直後の1齢幼虫は歩行を行うが、その後4齢までは固着し移動しない。
- (2) 成虫及び幼虫が葉裏に寄生して吸汁加害し、虫体からの分泌物と分泌物に発生するすす病による葉や果実の汚れ、トマトの着色異常果の発生原因となる。
- (3) トマト黄化葉巻病ウイルス(TYLCV; 本県では平成25年9月に初確認、平成25年9月13日付病害虫発生予察特殊報1号参照)、ウリ類の退緑黄化ウイルス(CCYV; 本県では未発生)を媒介する。
- (4) ナス科(トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、シントウ)、ウリ科(キュウリ、メロン)、アブラナ科(茎ブロッコリー)、ユリ科(アスパラガス)、ヒルガオ科(サツマイモ)、シソ科(シソ、セージ)、キク科(キク、ガーベラ)、アカネ科(ブーバルディア)、トウダイグサ科(ポインセチア)などへの寄生が確認されている。
- (5) 本種は低温に弱く、本県では野外越冬はできないと考えられる。

#### 4 防除対策

- (1) 野菜苗、花苗の導入に際してはタバココナジラミの寄生がないことを確認する。
- (2) 施設栽培の場合は、開口部に 0.4mm 以下の目合いの防虫ネットを張り、開放状態にしない。また、光反射マルチ資材や近紫外線除去フィルム等を設置し、成虫の侵入を防ぐ。
- (3) 施設、ほ場の内外に黄色粘着板や黄色粘着テープを設置し成虫の早期発見と捕殺を行う。
- (4) バイオタイプ Q は、一部の薬剤に対して感受性が低いとされているので、農薬については病害虫防除所や農業改良普及センター等に相談して使用する。また、薬剤抵抗性の発達を防止するために同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (5) 施設やほ場周辺の雑草や野生生えトマトは、タバココナジラミの発生源となるので適切に除去する。
- (6) トマト黄化葉巻病が発生した場合は、株を切断・抜根して完全に枯死させる。施設栽培の場合には、密閉して蒸し込み処理を行い（40℃、10 日以上）、タバココナジラミを死滅させる。残渣は土中に埋めるか、焼却する。



図1 タバココナジラミ成虫



図2 オンシツコナジラミ成虫



図3 タバココナジラミ幼虫



図4 オンシツコナジラミ 4 齢幼虫

長野県病害虫防除所  
所長：中澤 伸夫  
担当：吉沢しおり  
TEL：026-248-6471（直通）  
FAX：026-248-6473  
E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp